

— 大江健三郎『洪水はわが魂に及び』から

杉山若菜

一、はじめに — 「信仰を持たない者の祈り」

一九八〇年代後半期の思索を省みた大江健三郎は、「ブレイクからダンテ、また現代の仕事ではノースロップ・フライラの著作で祈りということを考えることが多かった<sup>(注1)</sup>」と明かす。折しも「信仰を持たない者の祈り」という題目での講演<sup>(注2)</sup>は、書き下ろし長編『懐かしい年への手紙』(八七年) 刊行直後のことで、「祈りのようなもの」「信仰の光のようなもの」の訪れについて、自身の生の軌跡を中軸に据えつつ多くの先人達のエピソードをも交えながら展開した。例えばカート・ヴォネガット、マルカム・ラウリー、ダンテ、エリアーデ、ミラン・クンデラといった文章家たちや、「反核兵器体制」を唱えたジョージ・ケナンの文章引用、または長男光の成長過程で起きた奇跡的なエピソードなど、多種多様な話題とユーモアを柔軟に織り交せている。それらエピソードの多様性を

繋ぎ収斂していく上で、含意ある「祈り」という言葉が、当講演を包括する重要語として選ばれているのであった。

注目すべきは、講演前半で「アッシジのフランチェスコ」と「ジヨバンニ」の逸話に触れ、「信仰を持つ」にあたって「大切なものを捨てることができるだろうか」という幼少期の煩悶が古い「傷痕」として残り続け、現在も尚「信仰は持たない」身であること、だがそれでも「信仰の光のようなもの」があつて、向こうからの光がこちらに届いたことがあると私は思っているのです」と率直に明かしている点だ。具体的な宗派に所属せずとも、「顕現体験」や「知恵が人間にあらわれる瞬間」の出来事を体験することで、「祈りというものが自分のなかにあると思う」と告げる大江のありようは、「直接的な純粋経験」(門脇佳吉<sup>(注3)</sup>)を持つ小説家として、「何かを問い続ける態度」「心の中にある方向づけ」の伝達に向けた切なる希求として、自ずと、普遍的な宗教性を孕むことと

なる。〈個人的な体験〉を越えて広汎に、「生命の春」が永続することを願う「世界中でいちばん大きい祈り」に連なる者であろうとすること。大江の志向は、現在もなお一貫している。

講演と同年月刊行の『懐かしい年への手紙』について、それから二〇年後の大江は、「青年だった自分とのつながりの上に展開する壮年期の前半を終えて、ここから後は行く先の老年を見つめながらの壮年期、その境い目の作品化<sup>(1964)</sup>」と位置づける。つまり同時期の講演「信仰を持たない者の祈り」もまた、壮年期を二分する分岐点に発現した言葉であった。この講演題目を契機に大江作品史・同時代評価を遡ると、七三年『洪水はわが魂に及び』（以後『洪水』と略す）に行き当たる。『洪水』単行本函には武田泰淳・野間宏・柴田翔・大岡信の優れた作品評が刻印されており、ことに大岡は「1960年代日本の、ひび割れと腐蝕の中でのたうっている精神状況を、黙示録的な電光のもとに浮かびあがらせることを志した野心作」で、「滑稽、悲惨、そしてまた、人をして肅然とさせる生真面目な行為と祈りがここにはある」と指摘。これまでの大江作品にはなかった「祈り」の芽吹きを確実に汲み取っていた。

そもそも「祈る」とは、「神や仏の名を呼び、幸いを請い願う。」あるいは「心から望む。希望する。念ずる。」<sup>(1964)</sup>「ことば、および、およそ人知を超えた何事かにむけて、あるいは何者かを仰ぎ

見て人々がなす行為である。サルトルのいわゆる無神論的実存主義に影響を受けた大江が、敢えて「祈る」「祈り」という言葉が作品世界に顕すにあたり、大江生来の資質はもとより、前述大岡の言「1960年代日本の、ひび割れと腐蝕の中でのたうっている精神状況」を呈した当時の時代状況に大江が深く感応した経緯も見逃せない。七三年発表の『洪水』はおよそ四年間にわたり構想・執筆された作品である。東大安田講堂占拠を始め各地の学園紛争が激化し、また水保病を始め多くの公害が社会問題化した六九年から、赤軍派による日航機「よど号」乗っ取り事件、日米安保条約の自動延長、三島由紀夫が割腹自殺した七〇年と、ベトナム帰還兵を機とした反戦デモの拡大や、成田闘争が激化した七一年を経て、七二年にはアメリカによるベトナム戦争北爆の再燃と、沖縄の日本復帰、加えて、『洪水』に決定的な影響を及ぼした浅間山荘連合赤軍事件が起きている。そして七三年、ベトナム和平協定が締結するものの、狂乱物価・オイルショックにより明らかとなった高度経済成長終焉による社会不安は、小松左京の大作『日本沈没』や、「人類滅亡」をうたった『ノストラダムスの大予言』（五島勉）をベストセラーに押し上げもした。社会動向に鋭敏な大江もまたそれら状況に感応し、ことに七一年以降の執筆物には「終末」「黙示録」「救済」といった言葉を多用することとなる。また七三年二月、小田実の「状況から」（『世界』）と併載した「状況へ」では、前述の時

代状況をも含む「滅亡の歌の大合唱」「終末論の流行」する世相を多種にわたり捉えている。「状況へ」連載最終回、大江はその結語に「はたして想像力的日本人と呼びうる者たちはどれほどの規模で実在するのか?」と問い、「強靱な祈念者たる自殺した作家」原氏喜の「破滅か、救済か、何とも知れない未来にむかって…」という文言を置いた。「祈る」「祈り」は、そのような時代状況下にこそ導かれた。

## 二、〈pray〉〈祈る〉・〈prayer〉〈祈り〉

印象的な作品題目『洪水はわが魂に及び』は『聖書』「詩篇」「大水ながれきたりて我がたましひにまでおよべり」(第六九篇<sup>(註)</sup>)からの着想であるが、執筆終盤におよび大江はそれと近似したフレーズ「水われを廻りて魂にも及ばんとし」(第二章)を含む「ヨナ書」の世界をこそ励ましとした経緯を、「消すことよって書く」(『新潮』七三年八月)にて明かした。「詩篇」の暗澹たる嘆きのフレーズから、回心と異議申し立ての両極を併せ持つ「ヨナ書」の嘆願に共振した創作過程を経て、作品題目はより一層『聖書』の多声を孕む。『聖書』は想像力を惹起する言葉の源泉として、当時の大江の表現意識領野に欠かせぬ重要な書物であった。そして、時代に相即した自己内外の危機的状況を、想像力の発動がもたらす言葉の力によって乗り越えようとする時、ドストエフスキー作品の「祈り」の磁場が新たに引用される。『洪水』作

品中盤、『カラマーゾフの兄弟』一節の「pray」(祈る)「prayer」(祈り)という語を巡り、神に祈って救いを求める原義とは異なった、新たな意味を欲する作中人物たちの対話が用意された。この対話を経て以降、彼らは個々の特性のまま緊密に結び合い、一つのユニットとして『洪水』世界を牽引する。対話は英訳の一部引用提示により始まる。次の通りである。

Young man, be not forgetful of prayer. Every time

you pray, if your prayer is sincere, there will be new feeling and new meaning in it, which will give you fresh courage, and you will understand that prayer is an education.

青年よ、祈りを忘れてはいけない。祈りをあげるたびに、それが誠実なものでさえあれば、新しい感情がひらめき、その感情にはこれまで知らなかった新しい思想が含まれていて、それが新たにまた激励してくれるだろう。そして、祈りが教育にはかならずことを理解できるのだ。

— 原卓也訳 —

〔『洪水』上巻第十章「相互教育」〕

「言葉の専門家」「勇魚」と「英語をまなぶ」「自由航海団」の若者たちは、英語版『カラマーゾフの兄弟』の「ソシマ長

老の説教「場面に登場する「pray」「prayer」という語が、どのような「実在する心のうごき」なのか、またどのような「行為」なのかを巡り、具体的な体感と経験に根ざした言葉の理解に向けて対話をする。英語と日本語訳を並置することで、「prayer」「pray」が「祈り」「祈りをあげる」と対照されるにもかかわらず、若者たちは「語対語の置きかえでなく」「英語そのものそのまま理解」すること、「祈り」を「新しい行動法として受けとめ消化することを熱心にもとめている」。「pray」することの強さ、激しさこそが問題の核心」であり、「何にたいして祈るのか」「なにに向って pray するかということ」は「二義的な問題」であるゆえに、最初から「神にたいして祈る」という例示を欲していない。その不自然な前提のもと、言葉に向けて根源的な問いを発する若者たちの熱意に感応した「勇魚」は、まず「prayer の実体」を自身の過去の体験に照らし合せる。そこで想起されたのは、以前息子「ジンの不意の顛倒」を真似た挙句、折れた歯の「カケラ」を自身の手で「歯茎から掘り出し」すまでの、「激甚な苦痛」に耐え「格闘していたあいだ」に生ずる「心のうごき」であった。それは「忍耐」と「集中にしたがって痛みは逆に鋭く」なる中、その「痛みの中核」に向けて「肉体を客観的にとらえる自由を確保している意識」が「乱暴な動きをおこさしめよ、と指令を発する」までの過程である。肉体的な「苦痛」に溺れず痛みを客観化する意識の自在に賭けた

「勇魚」の「格闘」は、ついに問題解決に向けた行動を起こさんと奮勇をふるう。肉体・意識・行動とが相即性を帯びた、その一連に、「勇魚」は「pray」という語を託す。

ところで、この、「苦痛」に直面した際の「勇魚」の行動の背景には、「子供の時分に自殺した父親」の際どい「励まし」の言葉がある。それは、「神様」が「予定調和的」に創造した世界にあって「人間が耐えしのぶことのできる範囲をこえて苦痛がくわえられる時被害者」は気絶・即死・発狂するのだから「前モツテ取越シ苦勞ヲスルトハナイ」というものだった。この「教訓」は「神」の創世の御業によってあらかじめ、すべからず、各「モナド」(单子)相互の内的法則によって自ずと調和が生じる原理を唱えたライブニッツの「予定調和」説が、極めてシニクに、逆手にとった形で利用されている。つまり「苦痛」の極限に際して人は「気絶・即死・発狂」するよう調整されているから、「取越シ苦勞ヲスルトハナイ」と言った父親が、結局は自殺したという成り行きと、その記憶が「pray の実体」を辿る際「勇魚」に想起され、「教訓」として役立っているという皮肉。「苦痛」の受容と対処法の暗澹たる意識世界は、自殺した父から子へと引き継がれ、父親の「励まし」の言葉に勇魚独自の「pray」体験とが奇妙に振じれ響きあう。それはライブニッツの弁神論がもたらすオプティミズムが、ペシミズムによって浸蝕されるエピソードであった。

このように、引用された『カラマーンゾフの兄弟』における「pray」本来の意味、「神」に「祈る」行為そのものは、『洪水』全体を通じてその不問を貫いている。「pray」の意は、「勇魚」の体験談を聞いた「ポウイ」「多麻吉」によって、行為に向かう動的意識に特化し収斂される。すなわち「pray」とは集中することであり「対象がなんであれひたすら肉体と意識をあげて集中すれば、むこうがわに通じようと通じまいと、その集中している自分の肉体と意識のなかに new feeling と new meaning が湧きおこってくる」と「多麻吉」は解釈する。「ひたすら肉体と意識をあげて集中」するこの行為「pray」が、新たな感情 (new feeling) を生み、新たな思想 (new meaning) を他者と分かち合う中に、新たな力 (fresh courage) をもたらす。「prayer」 「pray」は自他相互の教育 (education) 的行為に結ばれ、「ソシマ長老の説教」部分に表面上添う。

だが本来『カラマーンゾフの兄弟』本文は前掲引用英文の直後、次のように展開する。「Remember, too, every day, and whenever you can, repeat to yourself, "Lord, have mercy on all who appear before Thee today."」(またこのこともおぼえておくがよい。毎日、できるときでよいから、『主よ、今日御前に召されたすべての人を憐れみたまえ』と、たえず心の内でくりかえすのだ。)以降「ソシマ長老」は見知らぬ多くの靈魂に寄り添い祈ること、神の無限の慈悲

と憐れみのありようを懇々と語り継いでいた。だが「勇魚」が選んだテキスト箇所は神学的に重要な説教場面でありながら、肝心の「Lord」が登場する直前で区切られていて、神の慈悲や愛に言及する部分には立ち入らない。いやむしろ、偶発的ではあれ少年の殺人・遺棄に関わった過去を持つ「勇魚」にとって神は恐るべきものであるゆえの選択であったのか。それは第十章終盤「自由航海団」の若者たちと「大震災訓練」を共に体験した高揚の中「勇魚」が一人想起した「ソシマ長老の説教」別場面に表れている。「a soul standing in dread before the Lord」恐れおののきながら主の前に立ったその人の魂」に自己投影する「勇魚」は、「there is one to pray, that there is a fellow creature left on earth to love him too」地上にまだ自分を愛してくれる人間」すなわち「自由航海団」の若者たちによって祈りをさせられ、愛されることの欲びを夢想する。畏れ慄きながら「神」に向けて「祈る」ことより、「仲間とともに」「祈る」(集中する)こと、彼らに「祈ってもらうこと」(to pray)「愛されること」(to love)の熱望へと読み換えられて、「勇魚」の内面世界は束の間の幸福感を得る。このように眼前の「Lord」より「fellow」を熱く希求する「勇魚」と若者たちは、『カラマーンゾフの兄弟』本来の文脈とは異なる、彼らの「pray」「prayer」を内在化し、『洪水』第十章以降もなおその意味を作品世界に揺曳することとなる。

例えば、第十四章「縮む男」最期の「唇の動き」をなぞり「prayer is an education.」と□すぢむ「勇魚」や、第二十章「自由航海団」放送局の冒頭フレーズとしてアナウンスする「無線技師」と、彼の死に直面した「赤面」の「祈るよう□」□にした言葉も「Young man, be not forgetful of prayer.」であつた。また第二十一章、捨て身の反撃に出る直前の「多麻吉」も前掲引用文暗唱を「勇魚」にリクエストする。このフレーズが「自由航海団」としての自己確認と内的「集中」とを促すものとしておよそ危機的状況に発せられる時、垂直に仰ぎ見る対象（神）をもため彼らの「prayer」は、「根源的な空隙に対する深い予感」（高尾利数<sup>注</sup>）のもと、「泡を吹くような唇の動き」や「つぶやく」声となり、あるいは「穏やかにさえぎって」「安心」するほどの限られた水平上に漂っている。一方「勇魚」は「樹木の魂」「鯨の魂」の「代理人」として、それらと「交感」「同一化」し、あるいは出来事を「説明」しては時に「訴え」「嘆じ」るのだが、第十章「相互教育」以降「祈り」「祈る」ふるまいを時折覗かせるようになる。例えば第十三章、息子「ジン」の発熱に狼狽し「ヤマモモの『樹木の魂』に、幼児ノ熱ヲ鎮メテクダサイと頭の奥で祈っていた」と叙述され、ついで第十四章「縮む男」の処刑直後には、「ケヤキの『樹木の魂』にむけて」「祈るように叫びをあげ」る。そして最終章、「樹木の魂」「鯨の魂」にむけて「祈るように」と再び直喩で促され、

これまでの自身の過去・現在・未来のありようを語り始める。「この世界でもっとも善きもの」である「鯨の魂」「樹木の魂」に「祈るように」「祈り」始めたいく例かの「勇魚」の姿は、「」にて前述の、「生命の春」に向けた「世界中でいちばん大きい祈り」に連なる者のまえばれとなるう。「祈り」はまづ人間に虐げられた善なる自然の「魂」に向けて捧げられ、ことに最終章「祈るように」語る「勇魚」の言葉は、自身の死を積極的に受容するにあつたの「告白」となる。

あるいは「勇魚」最期の語りは、「人類ヲ滅亡」させる「大イナル水」の中「人類ノ兇暴ヲ告発スル」自分の「永年ノ考エノ正シサヲ証明」するために、「兇暴ナ抵抗ヲオコナウ」宣言でもあつた。そして「最後ノ人類タルオレノ肉体ニ意識ハ、宙ブラリンノママ爆発シ、ソシテ無」になることで、鯨と樹木が「ステテヨシ！」と唱和する光景を予言する。前述した、「聖書」「詩篇」ではなく「ヨナ書」からの「新しい声」「ある凜々たる響き」（消すことによつて書く）を聴きとつた反映は、この場面にこそ色濃い。はたして「ヨナ書」のヨナは、いわば預言が成就せぬ預言者であつた。神の使命から逃げようとしたヨナは、その報いに「大いなる魚」に飲み込まれ三日三晩を過ごすことで回心し、「わが誓願を汝に償さん 救は、エホバより出づるなり」と祈る。神に赦され地上に帰還して後、彼は異教徒ニネベの民に向けて滅亡の預言を熱心に説き、無事その使命を果たす。だが回心したニネ

への民を赦したエホバの寛容さに、預言の正統性と実現を信じていたヨナは「烈しく怒り」、エホバに「わが命を取り給へ」と「祈り」訴える。ヨナの悲痛な嘆きも、望みも、激烈な憤りも、すべてエホバに向けた絶対的な尊崇を前提とした「祈り」であるゆえに、彼はエホバに赦され、愛され、諭されることとなる。一方「勇魚」は、「鯨ト樹木ノ代理人ヲ僭称シテキタ」自覚のもと、「樹木の魂」「鯨の魂」に「祈るよ

うに」語りかけていた。エホバを仰ぎ見て怒るヨナと、自己弁明の末「兇暴ナ抵抗ヲオコナウ」「勇魚」との間に通底する「ある凜々たる響き」とは、死ぬことも辞さぬ両者の果敢な「抵抗」の姿から発せられていよう。しかし、絶対的なエホバに抵抗するヨナに比して「勇魚」の抵抗は、本来眼前の機動隊に、ひいてはその背後に対峙する妻や義父のような権力者に直接向かうはずだが、ひとり語りの中では具体的に「何者に」抵抗するのか明示されない。「核爆発」「巨大ナ地殻ノ変動」「津波カ大洪水」「巨鯨ノ群」といったカタストロフィの数々を想像し、「人類ノ兇暴ヲ告発スルコトヲ望ンデキタ」自分の「永年ノ考エノ正シサヲ証明スル」ために「兇暴ナ抵抗」を行うこと。命を賭してこの現状に「抵抗する」ことが「勇魚」の存在証明になる、その実現に向けて彼は行動する。それはちょうど「pray」が「何に」を切断し「集中する」行為そのものを際どく焦点化したことと同様に。また、「痛みと格闘」した一連の行為が勇魚の「pray」の原義

であれば、死を目前にした恐怖と苦痛を越え「兇暴な抵抗」に集中することは彼独自の「pray」でもあった。その結果自身が「宙ブラリンノママ」「無」になることを「スベテヨシー」と承認することも、「信仰を持たない者」が「祈るよ」に「発した「prayer」〈祈り〉であり、「勇魚」の〈生〉の極限に最期の「集中」は解き放たれる。

### 三、「<sup>ヴィジョン</sup>幻」「行為的直観」

『洪水』の「pray」は「ソシマ長老の説教」一節を引用するものの、引用選択とその援用に際し意図的に「Lord」から身を逸らし、もっぱら「肉体と意識をあげて集中」する行為として登場した。一方、『洪水』と「あわせ読む」ことを願って刊行した『文学ノート』第二章「言葉と文体、眼と観照」(初出『新潮』七一年三月号)には、この「pray」と近似した作家の創作時の内的状況が記されている。「緊張し、集中して、その時間をつらぬかれ自身の存在感の根にたちむか」ううちに(≡「pray」)、「肉体と意識」が「覚醒し解放されきって、自由に」「文体の運動をおすすめる」。やがて「充実した手ごたえとともに文体の運動」が「かれの肉体と意識の自由を支え」るに至ると「かれの眼のまゝに伝説の恐ろしい石像のように屹立」するもの、「ヴィジョン」が現れるという。作家の執筆前の「静止した状態でのかれの想像力の限界をはっきり超えた」「そのようなヴィジョン」が

「作家を変革する」と結ばれる時、「集中」(＝[pray])「想像力」の延長線上に出現した容易ならざる「ヴィジョン」こそ、「想像力の自由」を経た結実である。他、第四章「作家が異議申し立てを受ける」(初出『新潮』七二年三月号)にも「ヴィジョン」が登場する。「性的なるものにかかわる異様な」「情熱にとらわれた人間」が見る「超絶したヴィジョン」を文学作品に導入することの「普遍性」について語る際に用いられた。「ヴィジョン」は、「制作中の作家」(ライター・アット・ワーク)の意識を綴った全六章中、第二章と四章に認められるが、例数はそう多くない。とはいえ、その類義語「幻」と明確に使い分けられていることから、決して偶発的に選択された言葉でもない。例えば「幻」は、「幻の視点」「幻の文体の感覚」(第二章)というように、その仮構性・不明瞭さを表すのに用いている。一方「ヴィジョン」は、想像力の動的状態の極まりに出現する像であること、さらにそれが創作を通じて作家自らを「変革」する重要な徴表となっていることを鑑みると、七一、二年の大江における「想像力」考察に「ヴィジョン」という語の導入は留意すべきひとつの出来事であったのではないかと思われる。

「ヴィジョン」が重要語としてより頻出するのは、『洪水』と同年刊行の作家論集『同時代としての戦後』(一九七三年三月講談社)である。初出は『群像』七二年一月から翌年一月にかけての連載で、戦前・戦中・戦後を生きた十三人の

「戦後文学者」の〈生〉と〈死〉のありようを論じたものだ。「ヴィジョン」という語が十三人中九人の作家論に用いられ、そのほとんどが「終末観的なヴィジョン・黙示録的認識」に繋がっていく。三人の亡き作家たちを論じた最終章は「死者たち・最終のヴィジョンとわれら生き延びつつける者」と題し、自殺した原民喜・病死した梅崎春夫・剖腹自殺した三島由紀夫それぞれの遺作から、「末期の眼」を包含した「最終のヴィジョン」に重点を置く。それは「死にむけての最終のヴィジョン」であり「死にあたっての世界観照」とも換言する。以上を踏まえると「ヴィジョン」という語は七一年から七二年、三年とその使用頻度を増しながら、指示する意味も広汎に、あるいは生と死の深淵を凝視するかのごとく深化する。

一方、小説作品に「ヴィジョン」という語が頻出するのは、六九年から四年の執筆を経て発表の『洪水』からである。それ以前に「黙示録的」作品と評された「死滅する鯨の代理人」(『新潮』七一年一月)や「みずから我が涙をぬぐいたまう日」(『群像』七一年一〇月)本文には見当たらない。この二作品を単行化(七二年一〇月講談社)した際、新たに付した「\*二つの中篇をむすぶ作家のノート」にもやはりない。従って、小説内における「ヴィジョン」の特化は七三年発表の『洪水』を起点とし、前述した「pray」「prayer」と同様、第十章「相互教育」から始まるのであった。その際「ヴィジヨ



ン」ではなく「幻<sup>ヴィジョン</sup>」と表記されて、『文学ノート』と同様ルビのない「幻」と明確に書き分けられている。例えば、「幻」として再現したその空間をいっばいに埋めて、ただひとつかぶの樹木による巨きい森が、『鯨の木』があらわれた。」(第五章)、「幻を見ながら眼をつむった彼女のまわりの暗闇に、オマエハ優シイ、オマエハ無制限ニ優シイという幻の声のみちみちた。」(第十一章)というように、実在しないものを意識的に想像した際の映像・感覚に「幻」の語を用いている。一方「幻<sup>ヴィジョン</sup>」は、「自由航海団」の若者「ボオイ」が「眼をさまして」「勇魚」を殺そうとする際の「夢」とも「眠り」ともつかぬ半覚醒時に「夢のなかからというか、眠りのなかからというか、二本の腕が突き出て」彼を「ひきとめた」という出来事を「幻<sup>ヴィジョン</sup>を見た」と称すことから展開する。「ボオイ」の代弁者「多麻吉」はさらに「眠りながら千億分の一秒ほどのあいだに意味がつたわる」その刹那の映像を「読む力」によって瞬時に変換し、「勇魚」を「許せ、和解せよ」と「ボオイ」が把握した、と解説する。「幻<sup>ヴィジョン</sup>」「夢」、あるいは「二本の腕」が〈神の御手〉であるならば、〈啓示〉もしくは〈黙示〉と言い得るほどの宗教性を帯びた現象である。例えば聖書における「vision」と「dream」の基本的な捉え方について壬生正博氏は、「主は“vision”によって自らを顕現し、“dream”を通じて預言者たちに語りかける。また、神がこれらを通じて“reveal”「啓示する」ことから、

“vision”と“dream”は、“revelation”と密接な関連もある」と指摘する。また、聖書の“dream”は睡眠時に生起する「出来事であり、“vision”は「通常の意識とは異なるトランス状態(trance)と関連している」ものの、多数の聖書文例を分析した結果“vision”と“dream”の境界には曖昧さが感じ取れる」とも指摘する。もしも「ボオイ」を引きとめた「二本の腕」が神の顕現であるならば、あるいは「夢」「眠り」を通じて「許せ、和解せよ」と神の言葉が届いたならば、それを実現する「ボオイ」は預言者となろう。超越的な存在を暗示させるに十分な「ボオイ」の「幻<sup>ヴィジョン</sup>」は一見、聖書の「vision」「dream」双方の語のイメージを濃厚に孕んでいる。しかし「幻<sup>ヴィジョン</sup>」はあくまでも「二本の腕」であったのだ。神の、誰の、を問わぬ、顔を持たぬ「二本の腕」が殺気に満ちた「ボオイ」を引き留める。「多麻吉」の事例にいたっては「オートバイで、ある水準以上のスピードをだしていたり」「混戦して殴りあっている時」、「どこでカードを切りはじめるか」「本当に殴らねばならない敵だけを殴るとかいう」判断の際、直観として「幻<sup>ヴィジョン</sup>を読む力」が必要になるといふ。体感を伴い感得された「pray」「prayer」と同様、「幻<sup>ヴィジョン</sup>」もまた生々しい身体的感覚を伴って瞬時現前し、「ボオイ」「多麻吉」の当為・行為の指針となる。一方「勇魚」は、「ボオイ」「ジン」と共に音楽に聴き入るうちに「音楽にみちびかれた柔らかい想像力の解放が、しだいに濃

密かつ明確な「幻」にかれを近づけ、その意味するところを把握できたとはいわぬまでも、そのありようを容認させた」と語られる。「想像力の解放」が「かれを」「幻」に「近づけ」とは、「想像力の自由」に導かれて「ヴィジョン」に直面する作家の想像力の現場を示唆した『文学ノート』の記述に等しく、「幻」に捉えられる以前の「勇魚」の想像力的段階がまず示されている。だが本能的に「幻」を直観する「ボオイ」「多麻吉」とでは微妙な差異があるためか、それ以降「勇魚」はしばし「幻」のように」と直喩で眼前の現象を感知するのであった。

「ヴィジョン」が「作家を変革する」(消すこと)によって書く) ように、「幻」という語の出現を経て以降『洪水』世界は大きく動き出し、「自由航海団」の若者たちの未来像あるいは「勇魚」に到来する死の予兆が刻々と更新されることとなる。例えば「自由航海団」の若者たちは、近い将来起きる「大地震」の混乱に乗じて殺されぬよう「国籍も離脱して」「ノアの方舟」のごとく大海原へ出帆する「幻」を共有する集団であるが、作品中盤、「自由航海団」成員をより強固に「結びつけるため」あるいは肉体的苦痛から逃れ自殺する方便として自ら処刑されることを企図した「縮む男」によって窮地に陥る。それでもリーダー「喬木」は「死んだ人間」「縮む男」の「幻」をうけつぐ(第十六章)と表明する。それは「人類ノ未来ニ予言的」な肉体の変異を抱えた

「縮む男」を「核時代」の「予言者」として引き受け、「自由航海団」を「使徒の集団」と位置づけることだ。彼らはその「幻」を生成持続するために「生き残っている」以上、「幻」をぶっ壊しにくる「者たちに」「抵抗せざるをえない」(第十九章)。彼らの「幻」ははからずも宗教的受難と思想的闘争を稚拙に擬した惨状を呈し、その「コートームケイ」(第二十一章)な全てを懸命に生きるための徴憑と化する。一方「勇魚」は当初「幻」のように「自分がすでに死んでおりただ死後の意識がそこにエーテル状のかたまりのまま浮遊してジンとドクターとを見まもっている」(第十三章)奇妙な経験を得ている。「ジン」が「勇魚」以外の他者に守られて「独立」していく光景は彼自身の死が前提となっており、その感覚は既に第七章でも表明されていた。だがその時点では第十章で獲得した「幻」という語を持たぬ故か、「ある単純明瞭な啓示につきあたって、その啓示をあらためて意識的に把握しようとしている」「勇魚」の姿が描写されている。「啓示」「幻」のように「自身の死後を感じて以降、彼は「眼に見えるものと眼に見えぬもの」(第十六章)とを領有する認識を得て、第二十章「死にはじめている自分」への問いかけの後「幻」のように、あるいは「幻」そのものを見る。それは時に「数知れぬムクドリ」の群が舞いたった伊豆の「幻」が過去から「戻ってきた」予兆(第二十一章)を、あるいは「伊奈子」の姿に「十年後の彼女自身の「幻」を

重ね（第二十二章）、そして「銃眼の白い闇のむこう湿地帯全体に、憤怒した機動隊員の大群の「幻」が起きあがり」「その「幻」の照りかえし」により自分自身が「暴力的な泥人形」であることの（第二十章）「自覚」を直観するのであった。もはや「勇魚」も「ボオイ」と同様、「幻」が不意に「見られ」〈顕れる〉ものとなる。

あるいは「幻」とは訪れるものであった。またその出現の受動性に留まらず、翻って能動的に「見る」ことで行為・行動と相即し〈実践〉に結ばれるものでもあった。「自由航海団」の若者たちが共有する滅亡と出帆の未来像も彼らの行動に即して、例えば「勇魚」という「言葉の専門家」と共に「pray」「prayer」を独自に概念化し、あるいは「縮む男」の「幻」を撚り合わせ未来へと継承すべく変様する可能態であったように。また当初「幻」の生成・解釈を「容認する」程度であった勇魚が現在と未来との渾然一体化した「幻」のような光景に捉えられ、ついに見えぬ彼方を「見る」人となる進展も、時空間上を自在に働く想像力的「幻」の訪れを明示する。「幻」が「幻」「夢想」「空想」と次元を異にする由縁である。だが〈神〉という主語を逸した世界にあって、「無定形」自分「の」「レンズ」が映し出す「勇魚」の未来図に、彼の姿は「無い」。「自己自身の中に自己否定を含み、自己自身を越えて現在から現在へ行くという所に、行為というものが成立する」自己矛盾的な「行為的直

観」のごとく、勇魚の「幻」実践は「暴力的な泥人形」として「兇暴な抵抗」を発現し「宙ブラリンノママ爆発シ、ソシテ無」になる、その極限の、消点に、成就する。

#### 四、おわりに―埴谷・ブレイク

〈vision〉〈imagination〉

七二年二月に起きた浅間山荘事件によって、大江は既に書き始めていた原稿とその構想が当事件と相似するがゆえにそれを放棄し、新たなノート作成に基づいた執筆を再開した。ちょうどその頃、浅間山荘事件を受けて大江は埴谷雄高との間に「革命と死と文学―ドストエフスキー経験と現代」(『世界』六月)と題した対談を行っている。それは、七二、三年に頻出した「幻」という語の由来を考慮する上で重要な対話となる。対談はドストエフスキーの『悪霊』世界と浅間山荘事件とを比較検討し、また埴谷が翻訳したウォルピンスキー著『偉大なる憤怒の書―ドストエフスキー「悪霊」研究―』(以後『憤怒の書』と略す)の今日的意義に触れ、ことに大江は『憤怒の書』冒頭の「ヨナ(序詞)」に着目する。後に埴谷は大岡昇平に「大江健三郎はあのヨナに感心して『洪水は我が魂におよび』を書いたんだよ。話としては解決はついてないんだけど、神とヨナと両方の問題があるから触発的だね。小説的に面白い話だ。」と語っている。一方、対談と同年三月、大江は「埴谷雄高・夢と思索的想像力」

『群像』後『同時代としての戦後』収録)にて埴谷の姿を次のように捉えていた。「遠望するかぎり埴谷雄高は、もっとも終末観的ヴィジョン・黙示録的認識に密着した思想家のように見える」。しかし、「かれに近づいてゆくにつれて」「近い将来の核戦争の未来図など吹きとばしてしまふ、底知れぬ重さの楽天性」を見出していた。大江は埴谷の「底知れぬ重さの楽天性」を帯びた声について、「りんりんたる声」「りんりん」と響く声」「りんりんたる声」(傍線部は筆者による。以後も同様。)と評論中三度形容の上、「聴き手としてみずから体験しつつ不思議なほど」の力を帯びて伝わると言う。また同じく三度にわたり「恐るべき徹底ぶりのデモクラット」「公平無私のデモクラットの覚悟」を埴谷に見出し、「徹底してデモクラットな激励」を感得する。大江はこの埴谷像を、「ヨナ」解釈ひいては「勇魚」の最期に反映している。すなわち埴谷の「りんりんたる声」「デモクラット」なありようは、「不屈のデモクラット」ヨナの「鯨の腹の中からの祈りの声の、ある凛々たる響き」(「消すことによつて書く」となつて、「勇魚」と大江自身の身に届く。「ヨナ書」の「新しい声」は、埴谷自身と『憤怒の書』とからやつて来たのであった。

ところで、『憤怒の書』には翻訳者埴谷による「後記」が付してある。その冒頭にはウィリアム・ブレイクの預言詩「四人のゾアたち」(注1)第七夜の一節が引用されている。理性を

体現する「ユリゼン」が、墮落した世界で激しく燃えながら憤怒する「オーク」に言葉をかける場面だ。ドストエフスキの『悪霊』とウォルインスキイの『憤怒の書』、そしてブレイクの「四人のゾアたち」。この三作品はそれぞれ黙示録的世界に「恐るべき」「憤怒」を放ち咆哮する存在の形象によつて連繋する。そして興風館版『憤怒の書』を刊行した四三年、戦時下の日本に黙示録的ビジョンを見た埴谷の秘められた「憤怒」もまた重なり合う。大江は埴谷との対談で『憤怒の書』と『悪霊』とを三度読み返したと告げている。おそらく「後記」冒頭引用も何度となく目を通したことだろう。

そもそも大江は、十代の終わりにそれとは知らず目にした「四人のゾアたち」の印象深い一節を胸に刻みつつ、十年程後、読んでいた詩選集の中に偶然それと同様の文体を見出した。ウィリアム・ブレイクとの再会を機に次第に、その全作品は大江の〈生〉全体を照らす光源となっていく。「四人のゾアたち」の一節が「私の人生の預言詩」(注2)ではないかという最初の直観は、例えば長男誕生時にブレイク作品の読み返しを促しもした。翌年発表の『個人的な体験』(六四年)には、障害を持って誕生した赤ん坊の生死を巡り、早くもブレイクの「地獄の格言」詩句引用と「ベスト、長子の死」の絵が説明されている。大江のブレイク受容については、英文学・比較文学の見地から論じた小林恵子氏の連作論文に詳細な分析があり、ことに「四人のゾアたち」は「大江にとつて、ブ

レイクの出発であると同時に回帰点でもある」と指摘する。<sup>(注1)</sup>

ではたして『洪水』にブレイクの受容と反映は窺えるだろうか。ブレイクの断片的な詩句や絵・版画描写の直接的引用はない。が、例えば幼い頃に自殺した父とその子(「勇魚」)、または「勇魚」とその子(「ジン」)に、「父よ、あなたはどこへ行くのか」(『文学界』六八年一〇月)と同様の、ブレイクの詩「失われた小さな男の子」の影を認めることも可能であろう。だがむしろ、筆者はノースロップ・フライが指摘するところの<sup>(注2)</sup>、ブレイクが最も好んだ言葉「vision」と「imagination」をこそ『洪水』に頻出した「幻」に重ねてみたくなる。あるいは埴谷もまた「ブレイクから、物の本質を見るのは、単なる視覚でなくてヴィジョンであるという考え方を教わった」<sup>(注3)</sup>と後に明言していたことの証左として、『死霊』「自序」(四八年 真善美社)に「ヴィジョン」の語は生き生きと置かれていたのであった。従ってブレイクの「vision」を継承する埴谷と『憤怒の書』「後記」とを連ねて、『洪水』の、そして大江の「幻」出現の伏線としたい。

そこで改めて、『洪水』を独自の世界に導いた「pray」「prayer」「<sup>(注4)</sup>」の語が孕む多義性と、周到に「神」を回避した意図とを省みる。「作家が小説を書くこうとする……」(『新潮』七〇年一二月)で大江は、「想像力の自由」に懸けたサルトルの「モウリヤック批判」に賛同し、創作上「神の命題」「そのような存在あるいは存在の幻を、自分の小説の

様々な要素のなかへまねきいれずにやってゆくことができると述べていた。しかしおおよそ一年半後の埴谷との対談では「ドストエフスキーのような作家を現在われわれがもっていないこと」加えて「神の問題がわれわれにいまや欠落していることも大きい問題だ」と語っている。大江における「神の問題」言説は、七〇年末と七二年とでこのようにも変質したのだった。「神」を「まねきいれずにやってゆく」「想像力の自由」の実践として始まった『洪水』執筆は、現実と虚構との拮抗を経た新たな再構築の末、「神の問題」の「欠落」をこそ自己限定的命題として際どく問う、いわば「矛盾的同性」<sup>(注5)</sup>を体現することとなる。「深き自己矛盾を意識した」際に差し迫る「人生の悲哀」を凝視する、その彼方、「我々に宗教の問題と云ふものが起こつて来なければならぬ。」<sup>(注6)</sup>その重要な表徴として「pray」「prayer」「幻」は顕れ、そして、その背後にブレイクの光源が用意されている。「信仰を持たない」大江独自の「祈り」のはじまりである。

注

(注1) 『大江健三郎 作家自身を語る』大江健三郎(聞き手・構成)尾崎真理子(二〇〇七年五月新潮社)より。

(注2) 講演は一九八七年一〇月、東京女子大学にて。後、『人生の習慣』(一九九二年九月岩波書店)収録。

(注3) 門脇佳吉「大江文学の源泉Ⅱ 顕現経験とは何だったのか」『世界』(一九九五年七月)

(注4) 注1と同じ

(注5) 『広辞苑』第五版(一九九八年岩波書店)

(注6) 『舊新約聖書』(一九八二年日本聖書協会)より。以降『聖書』引用出典は全て当書による。

(注7) 『物語 哲学の歴史』伊藤邦武(二〇二二年一〇月中公新書)参照

(注8) 『The Brothers Karamazov』Fyodor Dostoevsky, translation by Constance Garnett, revised by Ralph E. Matlaw, (1976. W.W. Norton&company)

(注9) 『カラマーゾフの兄弟』中巻 ドストエフスキー・原卓也訳(一九七八年七月 新潮文庫)

(注10) 高尾利数「共苦としての情熱」『ユリイカ』(一九七四年三月青土社)

(注11) 『同時代としての戦後』以外で「ヴィジョン」という語が目を引く作家論に「跳躍とヴィジョン」『安岡章太郎全集』第二巻解説(一九七一年二月講談社)

(注12) 壬生正博「異界研究の視点から見る聖書の夢や幻視について」『地域健康文化学会論集』(二〇〇九年)

(注13) 西田幾多郎「自覚」『西田幾多郎哲学論集III』(一九八九年二月岩波文庫)

(注14) 西田幾多郎「行為的直観」『西田幾多郎哲学論集II』(一九八八年八月岩波文庫)

(注15) 『偉大なる憤怒の書』ドストエフスキー『悪霊』研究』ウオルインスキー・埴谷雄高訳(改版を含めて三度刊行。一九四三年六月興風館・一九五九年七月みすず書房、同社より改版一九七〇年八月)

(注16) 大岡昇平・埴谷雄高『二つの同時代史』(一九八四年七

月岩波書店)

(注17) 本稿にて引用するブレイクの作品名・翻訳は、『ブレイク全著作』梅津濟美訳(一九八九年名古屋大学出版会)による。

(注18) 注1と同じ

(注19) 「大江健三郎とブレイク(三)」『立命館文学』第551号(一九九七年一月)

(注20) 『Fearful Symmetry A Study Of Willia Blake』NORTHROP FRYE(一九六九年, Princeton Paperback Edition)より。大江が最初に読んだブレイク研究書である。

(注21) 注15と同じ

(注22) 西田幾多郎「絶対矛盾的自」(注13に同じ)

(注23) 西田幾多郎「場所的論理と宗教的世界観」(注13に同じ)  
\* 『洪水はわが魂に及び』テキストは、一九七三年九月新潮社刊行のものを、『文学ノート』テキストは一九七四年一月新潮社刊行のものを使用了。